

〈論文〉

ケントの都市クランブルックの経済と宗教 —宗教社会学的アプローチ—

須 永 隆*

An Economic and Religious Analysis of Cranbrook and its Neighbourhoods in the Seventeenth-Century Kent

Takashi Sunaga

Abstract

Cranbrook is situated in the Weald of Kent and was the central town that prospered from textile and iron industries in the seventeenth-century England. This town also, as one of the centers of puritanism, stood for the parliamentary causes during the Civil War, and had many nonconformists against the strict policy of the government after the Restoration. The aim of this article is to introduce the historical outline of Cranbrook by using the way of religious sociology.

1. はじめに

イングランド南東部の州ケントの中央部にクランブルック (Cranbrook) という小都市がある¹⁾。1289年に、カンタベリー大司教ジョン・ペッカム (John Peckham) から市場開設の許可を受け、市場町となり、中世から近世においては、ウィールド地方の毛織物工業の中心都市として栄えたところである。歴史上、有名な1381年の農民一揆 (ワット・タイラーの乱) の際には、このクランブルックはケントから蜂起した一都市としても機能した²⁾。また、産業革命へと向かう、近世の工業化過程の主要な道程である「プロト工業化」は、16～18世紀の農村部における手工業生産を出発点として、半農半工の自由土地保有農が中心的な役割を果たし、近隣の穀作地帯と地域間分業をおこないながら、海外輸出を通じて展開する農村工業であったが、クランブルックもこの「プロト工業化」を経験した都市であった。しかしながら、北部諸都市とは異なり、18世紀以降には「脱工業化」を経験した都市ともなった。

他方において、ケントの宗教史の観点からも、クランブルックは重要な位置を占めていた。17

* 亜細亜大学経済学部教授

世紀に生じたケントの出来事において最大のものは、いわゆる「ピューリタン革命」であるが、1642年から王政復古（1660年）までの約18年間は、その前後の歴史を包摂する激変の時代であった。この内戦から革命に至る過程はイングランドだけでなく、スコットランド、アイルランド、さらにウェールズをも巻き込む大事件であった³⁾。クランブルックの歴史においても同様であり、クランブルックは「1570年代中葉から内戦の勃発に至るまで、少数の一般信徒の中に、継続的なピューリタニズムの伝統の証拠がのこる⁴⁾」都市であり、内戦の際には、ケントにおける議会派の拠点のひとつとしての役割を果たしたのであった。1676年の国教会の調査結果コンプトン・センサスにおいては、国教徒（conformists）—898人、カトリック教徒（papists）—2人に対して、非国教徒（nonconformists）—400人となっていて⁵⁾、全体の31%弱が非国教徒であったとの報告がなされている。この非国教徒の数と割合は、他所と比べてかなり高く、王政復古から16年経過しても、クランブルックにおいて「ピューリタニズムの伝統」が継承されていたことを示すものである。

本稿は、周辺地域を視野にいれながら、ケントの中での、クランブルックの工業史と宗教史にとくに注目したい。地方史や地域史の観点から、16、17世紀のイングランド経済史を見つめることにより、これまでのわが国のイギリス経済史像を再検討していく試みのひとつとして、本稿を考えてみたい。

2. 研究史の中でのケント

これまでわが国の研究史の中で、ケントを扱った研究は多いとはいえない。ここでは、代表的な論文2点を取り上げて、ケントの地誌的研究を概観してみよう。まず、中村勝己（慶應義塾大学名誉教授）は、ピューリタニズムの動向に深く関心を寄せ、宗教社会学の観点から、「17世紀ケントの社会と経済（上）—近世イギリス思想史研究序説（3）」を『三田学会雑誌』75巻3号、1982年に発表した。その内容は以下のものであった。「……王政復古期のケントの非国教徒は、州東部（カンタベリ、セント・ローレンス・イン・サネット、サンドウィッチ、ドーヴァー、ガストンなど）、ウィールド地方（クランブルック、テンターデン、ゴードハーストなど）、メドウェイ河流域（チェザム、ロチェスター、メイドストン、ウェスト・マリングなど）、およびロンドン対岸の諸教区（ウーリッチ、デプフォードなど）を中心としている」と結論づけ、今後の課題として「これらの教区がいかなる荘園構造をもち、集落形態、耕地形態、共同体規制の強度、社会的分業・商品生産の展開度、ロンドン—大陸間の商業路との関連などが、非国教主義の展開にとってどのような意義をもっていたかを続稿（下）において検討することにしよう」（同論文、54頁）と締めくくっているが、残念ながら、続稿は執筆されずに終わった。しかし、中村は大塚久雄の影響を強く受け、狭義の「大塚史学」の観点から、ヴェーバーの宗教社会学を意識しつつ緻密な研究を進めたのであった⁶⁾。

ついで中村よりは遅れて、だがおそらく中村を意識することなく、篠塚信義（東北大学名誉教授）が「ウッドランド形成史覚書—ケント・ウィールドに関する研究史の批判的検討—」を書いており、それがイギリス中世史研究会編『中世イングランドの社会と国家』山川出版社、1994年に収められている。篠塚は早くから、ケントの地誌的構造が農村工業の出現条件に大きくかかわっていたことを見抜いており、現在のイギリス地域経済史に周知のオーソドックスな手法を用いて、ケントを分析したのである。この論文の中で篠塚は以下のように書いている。「本稿は、エヴァリットのケント定住史に関する一般的枠組みに従いつつ、かれが明らかにした貴重な史実の他に、アングロ・サクソン期のウィールドに関するウィットニーの研究成果を中心に、批判的に検討することを通じ、農村工業発展の背景となった社会環境の形成過程を、ケント・ウィールドについて解明するための手懸りを得ることを主眼とする」とし、中盤において、次の重要な指摘につなげていく。「これらの、ダウンランド（とチャートランド）、ウィールド両地には、定住時の条件の違いによって、それぞれ特有の性格を備えた『自由な』社会が出現する。両地帯とも、開墾・定住は個別に行われたのであるが、その担い手が両地域では異なり、始源地に比較的近いダウンランドは『ジェントリー』階級が主導権を握りつつ植民された。ドゥームズデイ・ブックによると、1086年には始源地とは著しく異なった土地所有の構造が既に現れていた。始源地にあった61の所領の8割強は、国王か教会の所領であり、『私的』個人の所領は僅かに2割弱に過ぎなかった。対するにダウンズでは国王領はなく、教会領は僅かに2割強であったのに対し、『私的』所領は7割強を占める。またダウンズで各『私人』が所有していた所領の数は一つか二つが大半であり、小規模の俗人所領が多数ひしめいていた。エドワード証聖王時代も殆ど同じ土地所有の構造を示すが、傾向は1086年よりも著しい。こうした状況の下で、いわば『ジェントリーの自由』とでもいうべき性質の社会が形成された。これに対し、ウィールドは『ヨーマン』クラスが中心となって定住が行われた結果、『ヨーマンの自由』とでもいうべき性質の社会が形成された」（同書、179頁）のである。

篠塚はケント地誌的構造を探索しながら、そこに潜む権力構造や共同体規制の強弱度を予感し、ダウンランド＝「ジェントリーの自由」、ウィールド＝「ヨーマンの自由」という、あえて公理のような表現を用いたのである。この論文で篠塚は、典型的の把握を導入しており、のちに続く後進の研究の指針となるような見事な論述を展開したのであった。

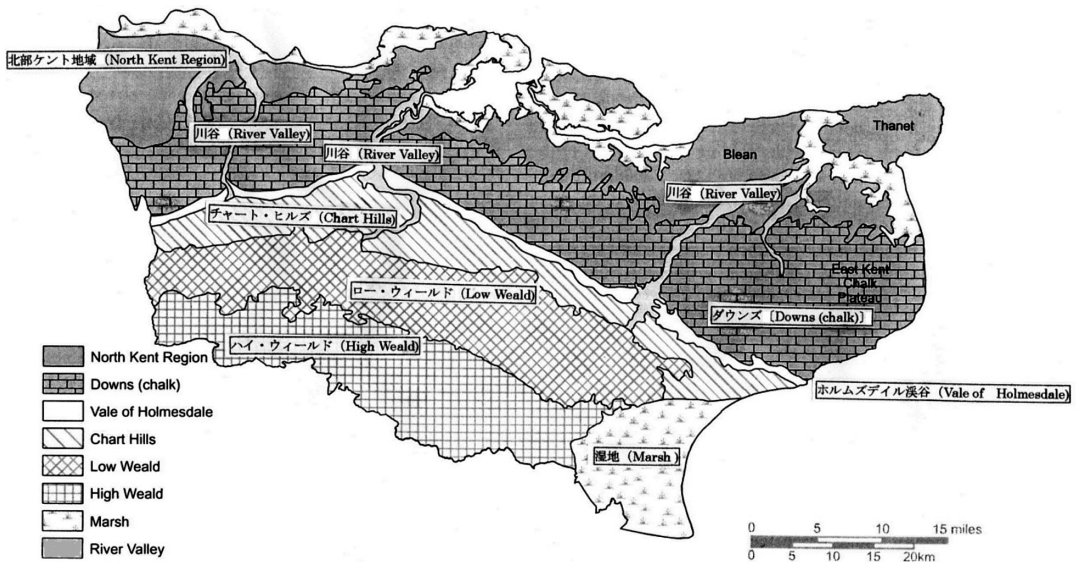
中村・篠塚の両者の研究成果は、わが国のイギリス地域経済史研究に重要な意義をもっている。というのも、中村の教会史的、宗教社会学的視点（イングランドでは「宗教地理学」と呼ばれている手法）と篠塚の「地誌的方法」とを重ね合わせると、非常に有益な社会科学上の分析手法が出現するからである。ここで宗教（教会）を強調するのは、17世紀の、内戦から革命に至る流れにおいて、「国王派につくか」、あるいは「議会派につくか」を決める要因として、宗教的要因が強く働いていたことがわかってきており、とりわけ議会派においては、「カトリックの方向へと変質した国教会」の改革をめざすピューリタニズムが関係したからである。この対立は1660年の王政復古後の政治的世界においても、「高教会派的要因」（High Church element）と「低教会派的要因」

(Low Church element)⁷⁾ との対抗という形で、党派の背後に宗教的要因が強く働いていたのである。以上のような状況であるために、中村の「宗教社会学」が篠塚の「地誌的分析」と統合される時、ケント史のみならず、他州の歴史分析においても、社会科学上の分析装置が揃うことになるのである。

3. ケントの地誌的構造とクランブルックの位置

1577年に聖職者のウィリアム・ハリソン (William Harrison) は『イングランド概観』(*Description of England*) を出版し、その中で「われわれの土壌は平場の土地と森林地帯とに分かれており、前者の平場にある家屋は、どの町でも通りと通路とに合わさっており、統一されて造られている。ところが、森林地帯の諸州では (あちこちにある大きな市場町を除いてではあるが)、家屋は広く散らばって建っており、各自は自分が占有する場所の真中に住んでいる」(our soil being into champaign ground and woodland, the houses of the first lie uniformly builded in every town together with streets and lanes, whereas in the woodland countries (except here and there in great market towns) they stand scattered abroad, each one dwelling in the midst of his own occupying)⁸⁾ と書いている。通常では何気なく読み飛ばしてしまうかもしれない、こうした記述の中に、じつはイングランドの地誌の本質的な特徴が示されていたのである。ケントにおいても、次の図1で示すような、特徴的な地誌的概観が確認されるのである。

図1 ケントの地誌的構造



(注) ジョアン・サーズは、本図の分類とは異なり、北東部のサニット (Thanet) と北東部の「北部ケント地域」をダウンスに含めている。

(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.2 を筆者が加工した。

ここで示されるように、ケントは以下の地誌的構成要素から成り立っていた。すなわち、①北西部の「北部ケント地域」、②中央部を横に貫く、平場の「ダウズ」地域、③その南の丘陵地帯の「チャート・ヒルズ」、④さらにその丘を越えて、サセックスの北部にまで広がる「ウィールド」である。ウィリアム・ハリソンの記述では「森林地帯」(woodland)と記載された場所が、ケントにおいては、このウィールドにあたるのである。ケントの場合、ウィールドは「ロー・ウィールド」と「ハイ・ウィールド」の二地域に分類されているが、ここでは、克蘭ブルックがウィールドに位置していたことを確認しておきたい。また、ケントにおいては、南東部に「湿地帯」(marsh)が広がっていたことも記憶しておきたい⁹⁾。

ところで、こうした地誌的構造の中で、ケントの産業はどのような性格を帯びて立地していたのであろうか。著名な農業史家のジョアン・サースクは、隣接州のサセックスとあわせて、その特徴をいくつか指摘しているが、それを項目別に整理すると以下ようになる。

①ケントが首都ロンドンに隣接していることにより、その恩恵から、無制限ともいえる市場(unlimited market)を確保できた¹⁰⁾。ケントの北西部はとくにロンドン南東地区に近接しており、ダウズからの穀物の輸送には有利であった。ケントの産業史において、この首都ロンドンへの隣接という条件は、ヨーロッパへの近接という環境とともに、強調される必要がある。

②ケントの北面を横に流れるダウズにおいては、16、17世紀において、小麦(wheat)、大麦(barley)、オート麦(oats)の生産を主としたが、少量ながら、スズメエンドウ(tares)やエンドウ豆(peas)も耕作されており、高台の牧草地(pasture)では、「羊の群れ」(sheep flocks)が放牧されていた。また農民は、羊のほかに牛(cows)も飼育し、ミルク、チーズ、バターを製造していた¹¹⁾。いくぶん誇張かもしれないが、ダウズはケントの「穀倉地帯」だったのである。

③ダウズの農場規模はウィールドのそれと比べると、一般的に広いことが特徴的である。たとえば、東部ダウズに位置するアディシャム(Adisham)の農民ニコラス・レグノールド(Nicholas Raignold)は1601年時点で、小麦30エーカー、オート麦16エーカー、大麦2エーカー、エンドウ豆7エーカーを生産し、家畜については、雌牛9頭、雄牛8頭、豚13頭、羊94頭を飼っていた¹²⁾。これらの数字から、レグノールドの主たる収入源が小麦と羊であったことが窺えるのである。これにたいして、ウィールドにおける農民の耕作地面積は、ダウズの農民と比べると、狭く、1エーカーを約4047㎡(63.616m×63.616m)として、通常10エーカーを越えることはなかった。

④16世紀においてウィールドは、深く森林(densely wooded)に覆われており、そこに人口が集中する傾向が見られた。ダウズの教会区が一般に60世帯、より頻繁には30世帯以下だったのにたいして、ウィールドは教会区あたり200から300世帯を抱えていた。また、土壌については、ロー・ウィールドは重い粘土、ハイ・ウィールドは砂と粘土からなっていた。そこでの典型的な農民は「小農」(smaller Wealden farmers)であって¹³⁾、牧羊よりは「家畜の飼育」に特化する傾向があった。農民はチーズやバターを造り、その多くは家庭内消費用として使用されたが、なかにはロザー溪谷(the Rother vally)の農民のように、一般市場向けの商品を製造する者もいた。

⑤サースクの「ウィールドは多くの人びとを引きつけ、平均的な農場も狭かったので、多くの人びとは所得を補完するために副業に依存した」との指摘¹⁴⁾は、とくに重要である。その「副業」は、製鉄業・毛織物工業関連であったり、あるいは日用品関連の製造であったりした。一方、他地域の人びとはそうした「就労機会」を求めて移入し、ウィールドの人口はさらに増加することになった。

⑥ウィールドではマナ（荘園）支配が弱く、流入する移住者にたいする規制も無きに等しいものであった。また、相続慣行もウィールド地方の人口成長に一役買っていたといわれる。というのもケントにおいては、「ガヴェルカインド」（gavelkind）というケント特有の土地相続慣習があり、古くから男子均分相続土地保有が実施されていたからである¹⁵⁾。ただし、これには一定の留保条件を加える必要がある。というのもケント全体でこの慣習が存在したからである。「ケントのウィールドで普及していた相続慣行は家内工業の成長を有利にしたかもしれない。しかしその重要性をあまりに強調しすぎてはならない。というのも『ガヴェルカインド』の慣習はウィールドだけでなく、ケント全体に適用されていたからである」とのミカエル・ツェルの指摘¹⁶⁾は傾聴に値する。

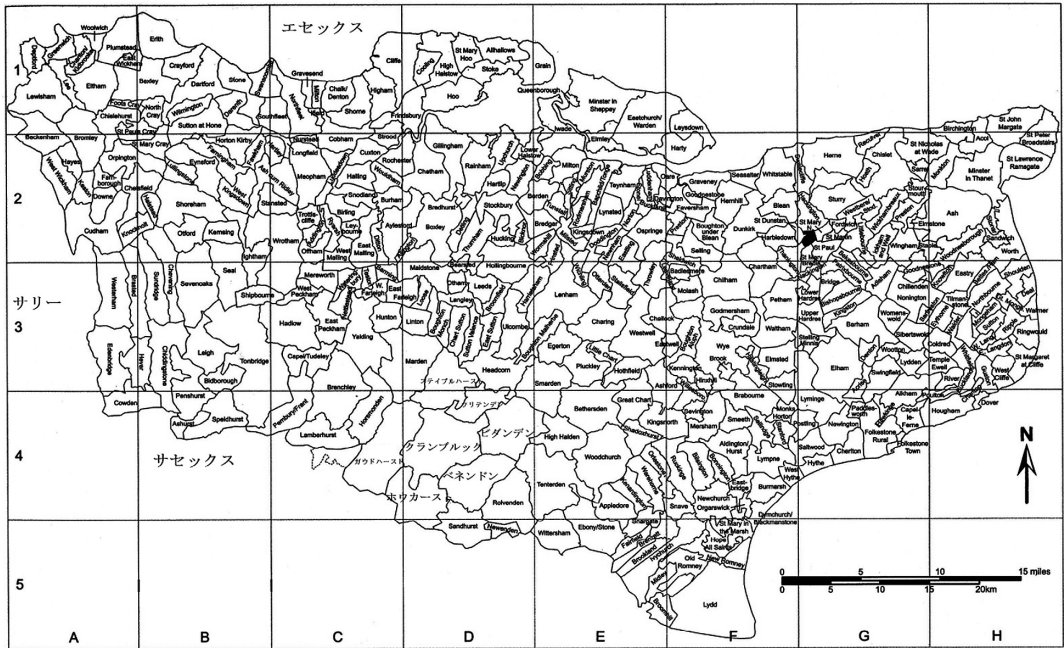
⑦さらに、北部のテムズ川沿岸部、北東部のサニット（Thanet）とシェッピイ（Sheppey）地域、東南の沿岸部に、沼沢地である「湿地帯」（marshes）が広がっていた。ケントにおいては、ロムニイ（Romney）、ウォーランド（Walland）、デンジ（Denge）、ニュー・ロムニイ（New Romney）などの湿地帯があった。

⑧マナのタイプも他州とは異なっていた。すなわち、ミドランドの村落——マナ（荘園）の土地が村落の土地と重なっていることが多く、穀作が共同耕地（common fields）でおこなわれ、マナ規制が一年を通じて支配的であった——などと比較した場合、ケントのマナは遥かに規制が弱かったといわれる。「ケントのマナはしばしば一直営地と自由土地保有農からなる小領地にすぎず、慣習土地保有農が存在しない場合には、その領地の経営的・法的機能はきわめて小さいものであった」のである¹⁷⁾。要するに、ケントの社会は「自由土地保有農」（freeholders）が多数を占めていたのである¹⁸⁾。

⑨16世紀以降の「囲い込み運動」（enclosure movement）については、他州とは異なる特徴を有しており、以下の3点を指摘できる。第一に、16世紀の段階で既にケントの大部分が囲い込まれていたために、「囲い込み運動」全体の流れに巻き込まれることがなかった。第二に、分割された牧草地（fields）がしばしば小規模であったために、村落共同体の共同放牧慣行（commonpasturing）に服しておらず、そのために個人々が近隣住人の反対にあうことなく、囲い込みを実施できた。第三に、ケントの囲い込みは、耕作地を牧草地に変えてしまう、例の「羊の放牧」（sheep farming）ではなかったことも重要である¹⁹⁾。

ところで、クランブルックを教会区の中で位置づけておく必要がある。図2の教会区の分布図でも示したように、クランブルック（4D）[図2の縦・横の表示、以下も同様]はケントの中南部に位置しているが、当地は、その周辺を6つの教会区——ステイブルハースト（Staplehurst）（3・4 D）、ガウドハースト（Goudhurst）（4C）、ハウカーズト（Hawkhurst）（4C）、ベネンドン

図2 ケントの教会区 (parishes) とクランブルック周辺地域



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2005 の表紙で使われているものを筆者が加工した。教会区ごとの面積は多様であるが、明らかに、北東部は狭く、南西部は広いことを読み取ることができる。

(Benenden) (4D)、ビダンデン (Biddenden) (4D)、フリテンデン (Frittenden) (4D) —— によって囲まれていた。したがって経済や宗教を語る場合、クランブルックのみならず、そうした周辺の教会区をも含めて論じることが有効であり、以下でも、周辺地区を考慮に入れて考察してみる。こうした諸教会区も、ウィールド地方に位置していたが、他の教会区とりわけダウンズの教会区と比べると、教会区ごとの面積が広いことが特徴として挙げられる。行政上の監督 (あるいは監視) という点からみて、ウィールド地方は緩慢にならざるを得なかったことが、そうした事実からも推測されるのである。ウィールド地方には「森林」が多く存在したこととも関連して、そのことが「異端的」な宗教思想を扱う場合には大事な観点となることは、後段において示されるだろう。

4. クランブルックと周辺の諸区

16、17世紀のクランブルック史については、2003年にロレーン・フリッシャー (Lorraine Flisher) が地誌史を前提とした「学位論文」という形で、人口史、土地制度史、農業史、工業史、宗教史の観点から詳細に論じている²⁰⁾。ここでは主としてフリッシャーの学位論文に依拠して、クランブルックの歴史的特徴を浮き彫りにしてみることにする。

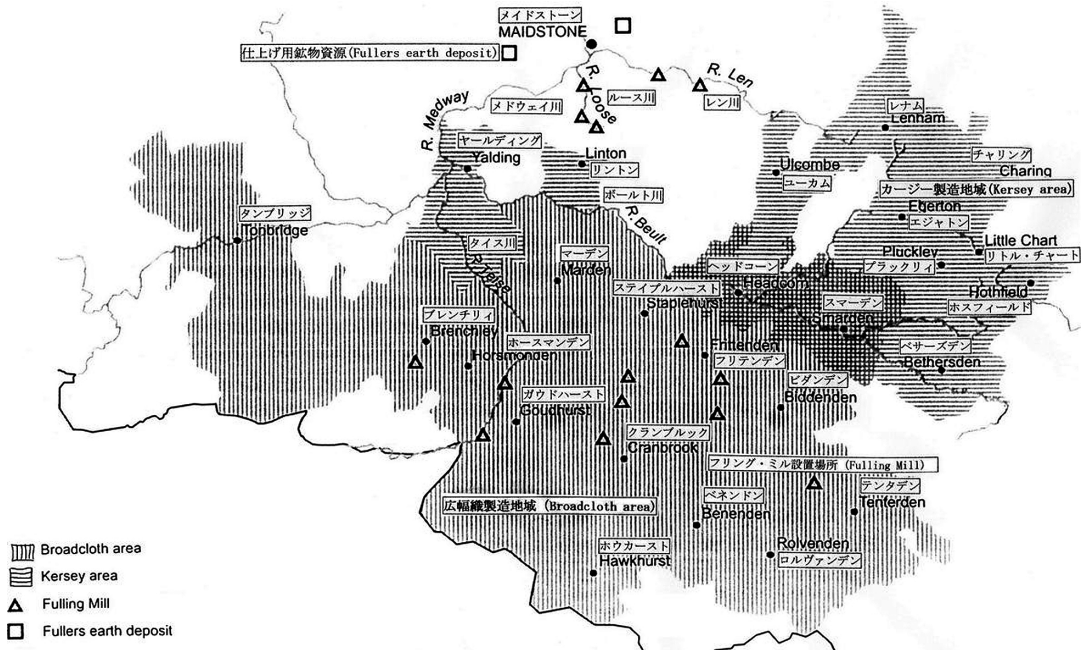
まず、フリッシャーも規定するように、克蘭ブルックとその周辺に位置するステイブルハースト、ガウドハースト、ホウカースト、ベネンドン、ビダンデン、フリテンデンは、「古典的な森林牧畜地域」(a classic 'wood-pasture' district) に位置していた。そうした地域では穀作と牧畜がおこなわれ、家畜の飼育に力点が置かれていた²¹⁾。また、サセックス・ウィールドと比較すると、同じウィールドであるにしても、ケント・ウィールドの方が領主権 (lordship) が弱く、農民の自由度も高く、「多くのケントの小農は自分の貨幣賃金を自分自身の生産物で補う労働者であり職人でもあった」といわれていたのである²²⁾。

(1) クランブルックおよび周辺地域の産業

有名な小説家でジャーナリストでもあったダニエル・デフォーは『イギリス旅行記』(1724-26)のなかで、次のように記している。「この州(ケント—引用者)にはたいした製造業はない。残っているのは、主としてキャンタベリイ内と、このメイドストーンの町および近隣である。この町メイドストーンの製造業は主として糸、つまり麻糸であり、かなりよく作られているが、とくに良質なものではない。メドウェイ川の反対側、克蘭ブルック、テンターデン、ガウドハーストおよび周辺のその他の村落(この地域の周辺でもあるのだが)においては、かつてはかなりの繊維取引が行われていた。ケントのヨーマン——その多くが有名であったが——はその住人であり、彼らは繊維取引で財を築いたのである。しかし、その取引もすっかり衰退し、州全体でも10人の織元も残っていない」(There is not much manufacturing in this county; what is left, is chiefly at Canterbury, and in this town of Maidstone, and the neighbourhood; the manufacture of this town is principally in thread, that is to say, linnen thread, which they make to pretty good perfection, tho' not extraordinary fine. At Cranbrook, Tenterden, Goudhurst, and other villages thereabout, which are also in the neighbourhood of this part, on the other side the Medway, there was once a very considerable cloathing trade carry'd on, and the yeomen of Kent, of which so much has been fam'd, were generally the inhabitants on that side, and who were much enrich'd by that clothing trade; but that trade is now quite decay'd, and scarce ten clothiers left in all the county.²³⁾) (下線引用者)

このデフォーの文章から推定されることはなんだろうか。ここから理解されるのは、デフォーが周遊した時点では、ケントの工業活動は衰退し、すでに過去のものとなりつつあったということである。だが、そのように18世紀には衰退を経験するというものの、17世紀に関しては、克蘭ブルックおよびその周辺地域の産業として筆頭に挙げるべきものは、やはり研究史的にも、繊維産業とりわけ毛織物工業 (woollen textiles) だったのである。サースクによれば、キャンタベリイやメイドストーンと並んで、ウィールド地方の繊維工業は14~15世紀に確立し²⁴⁾、それが16世紀には広幅織工業として成長する。原料となる羊毛は、ケントやサセックスのダウズ、ロムネイ・マーシュ (Romney marsh) から調達したといわれる²⁵⁾。羊の放牧はダウズにおいて中心的になされたからである。工業形態としては家内工業 (cottage industries) であり、子供や妻を含む家族

図3 ウィールド地方の旧毛織物工業地域（1500～1700年）



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.75 を筆者が加工した。図はケントの南西部を示している。

がこうした労働集約的な工業では重要な意味をもっていたのである。また、マヴィス・メイトは「1500年以降、訴訟記録集 (Plea Rolls) に記録された信用 (credit) の流れは、主としてロンドンの供給者 (metropolitan suppliers) からきた。ロンドンの服地屋 (merciers)、仕立屋 (tailors)、反物屋 (drapers) はクランブルック、ビダンデン、ガウドハースト、テンターデン、ホースマンデン (Horsmonden) の織元に信用を提供した」²⁶⁾と指摘しており、ロンドン商人たちとウィールド地方の毛織物業者との取引が活発化していたことがわかるのである。

ところで、図3は、先にも引用したグリニッジ大学のミカエル・ツェルと、リーディング大学のクリストファー・チョークリン (Christopher Chalklin) によって作成された、ウィールド地方の旧毛織物工業地帯に関する地図である。作成者は両者ともに代表的なケント史の研究者であるが、彼らの作成した地図に依拠すると、ケントの主要な毛織物工業地帯として栄えたクランブルックおよびその周辺地域には、以下のような独自の歴史過程があったことが判明する。

①中世までのケントのウール毛織物はキャンタベリイに集中していたが²⁷⁾、15世紀頃になると、ウィールド地方の中央の村落 (農村) で毛織物工業がおこなわれるようになる。ウィールド地方のウール毛織物工業は、織物のタイプにより、2種類に分類された²⁸⁾。ひとつは、ウィールド地方の中央の村落で製造された、重い広幅織であり、もうひとつは、ウィールド地方の北部で製造された、安価なカージー織——名前の由来はサフォーク州の町カージー (Kersey) であるといわれる——

である。図3が明瞭に示すように、広幅織製造の中心地は、クランブルック、ビダンデン、ベネンドン、ガウドハースト、ハウカースト、スマーデン、ステイプルハースト、ホースマンデンといった教会区であった。この毛織物工業は労働集約的な産業であり、16世紀中ごろ、人口稠密で、牧畜農業（pastoral farming）地域に確立した。これはプロト工業化論の基本概念でもある²⁹⁾。

②流通先（市場）については、中規模・大規模な織元は高級品を製造し、少なくとも全体の半分を輸出用としてロンドンのマーチャント・アドヴェンチャラーズ・カンパニーに販売したといわれる。またそれより小規模な織元は、キャンタベリィやメイドストーンのような「地域市場」か、あるいは、自分よりも富裕な競争相手に販売することもあった³⁰⁾。商品の品質によって販路が異なったことに注意したい。また安価なカージー織については、海外の顧客というよりは、国内に顧客を見出す傾向があり、その生産は、通常、撚り糸の製造を除いて、問屋制度に基づいてではなく、カージー製造業者（kerseymakers）と呼ばれる「独立の織布工兼織元」（independent weaver-clothiers）によって製造された³¹⁾。

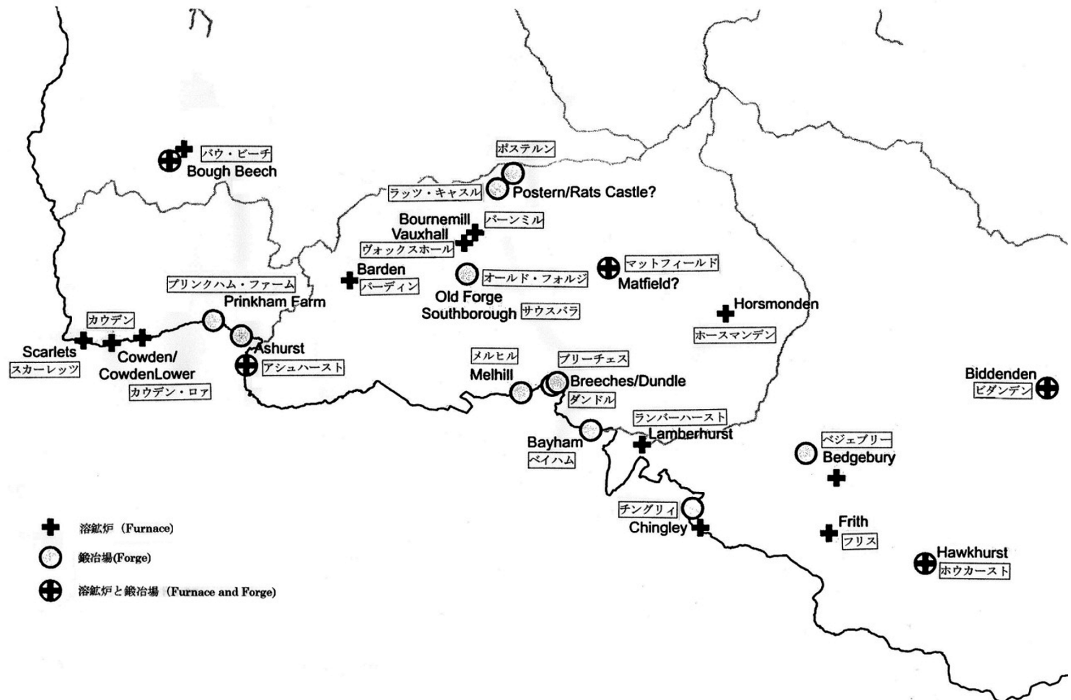
③仕上げのためには、織った布を独立の仕上工（independent fullers）のところに移動させ、その仕上工は、洗縮充機であるフリング・ミル（fulling mills）を、急流を利用する水車を動力として稼働させた。フリング・ミルは16世紀後半、10～15機程度しかなく、クランブルックの北6～10マイルの範囲内に多く存在したが、メイドストーンを中心としてメドウェイ川、ルース川、レン川沿岸にも存在していた³²⁾。

④ 1616年以降、伝統的なケントのウールン毛織物工業は衰退し、30年戦争（1616～1648年）の混乱が原因となって、ドイツや中央ヨーロッパでの市場を失うことになる。17世紀を通じて、ウィールド地方の伝統的な毛織物工業は衰退していくが、しかしケントの毛織物工業全体が衰退していくわけではない。「新毛織物」（New Draperies）というウーステッド工業がケントの東部の都市で発達するからである³³⁾。1561年にサンドウィッチに外国人（フランドル人・ワロン人）が定住し、彼らはイギリス人にとっては新種の、ベイ（bays）、セイ（says）を製造するようになったのである。1567年にはメイドストーンにフランドル人が入植し、麻糸製造（linen thread manufacture）を紹介している。さらに1575年になるとサンドウィッチのワロン人の一部がキャンタベリィに移動し、居留地を形成した。彼ら外国人を通じてキャンタベリィには絹の製造が移植されたのである。そうした都市を拠点として、新ウーステッドの製造が確立するが、本稿の主題からずれるので、今回はこれ以上立ち入らないこととする。

続いて図4は、やはりミカエル・ツェルとクリストファー・チョークリンが共同で作成したウィールド地方の「製鉄業」の立地に関する地図である。この図4から判明することは以下の点である。

①クランブルックは直接的には含まれていないけれども、その周辺地域、とくに西部ウィールド地方は「製鉄業」の中心地帯であった³⁴⁾。ツェルとチョークリンによれば、当地方の製鉄業は16世紀に拡大し、17世紀の内戦期においても繁栄は継続していたが、18世紀に入り南ウェールズと

図4 ウィールド地方の製鉄業の立地 (1540~1700年)



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.76 を筆者が加工した。図はケントの西南部を示している。

南ヨークシャーの製鉄業が勃興してくると、その重要性は失われていくとされている。

②発展の経路としては、南に位置するサセックス・ウィールド地方——最初の近代的な溶鉱炉 (blast furnace) は1496年、ニューブリッジ (Newbridge) に建造される——が先行し、その支流として1550年代に、ケント・ウィールド地方の製鉄業が展開する。1573年時点で、ケント・ウィールド地方には溶鉱炉8件、鍛冶場6件があり、さらに1590年代に溶鉱炉は15件となり、生産のピークを迎えた³⁵⁾。

③立地的には、生産の中心地はケント・ウィールド地方の西部 [とくにタンブリッジ (Tonbridge) (3B)、アシュハースト (4B)、カウデン (4A)] と中央部 [ホースマンデン (4C)、ガウドハースト (4C)、ランバーハースト (4C)、クランブルック (4D)、ホウカースト (4D)] であり、そこにおいて毛織物工業の他に、製鉄業が追加的な雇用を産み出したのである³⁶⁾。

④溶鉱炉や鍛冶場の建設には費用がかさむために、シドニー家 (Sidneys)、クルペパー家 (Culpepers)、ファン家 (Fanes) などの、その地域の豊かな土地所有者 (名望家) が出資し経営者となった。被雇用者は数十人 (a score of workers) 程度が通例であったが、ブレンチリイ (Brenchley) (3・4C) とホースマンデン (4C) のブラウン家 (Browne family) は王室御用達の銃器製造業者 (gunfounders) として、16世紀末から17世紀にかけて、200人程度の被雇用者を抱え

ていた³⁷⁾。

⑤製造品については、軍用・民間用の2種類からなっており、軍事需要としては大砲や銃、また民間需要としては、ポット、フライパン、農具などがあつた。鍛鉄棒 (bars of wrought iron) も造られたが、それは商人を通じてロンドンに輸送された。

さて、表1はフリッシャーが遺産目録を基にして、1570年から1669年までのクランブルック住人の職業構成を検出したものである。この表1について、最初に1570年から1619年までを見てみ

表1 クランブルックの職業構成

1570~1619年 農業 (Farming)		製造 (Manufactures)		流通 (Distributive)	
農民 (Farmers)	59	繊維 (Textiles)	76	商店 (Shopkeepers)	21
		内訳			
		織元 (Clothiers)	29		
		織布工 (Weavers)	42		
		仕上工 (Finishing)	7		
小土地保有農 (Smallholders)	20	鍛冶工 (Smiths)	5	醸造 (Brewers) / 製粉 (Millers)	13
		仕立屋 (Tailors)	4	専門職 (Professionals)	5
		皮革工 (Leather)	7	運搬 (Carriers)	8
		木材加工 (Woodworking)	12		
合計	79人 (34.4%)	合計	104人 (45.2%)	合計	47人 (20.4%)
遺産目録	230件				
1620~1669年 農業 (Farming)		製造 (Manufactures)		流通 (Distributive)	
農民 (Farmers)	72	繊維 (Textiles)	77	商店 (Shopkeepers)	19
		内訳			
		織元 (Clothiers)	45		
		織布工 (Weavers)	42		
		仕上工 (Finishing)	7		
小土地保有農 (Smallholders)	26	鍛冶工 (Smiths)	6	醸造 (Brewers) / 製粉 (Millers)	18
		仕立屋 (Tailors)	3	専門職 (Professionals)	5
		皮革工 (Leather)	13	運搬 (Carriers)	2
		木材加工 (Woodworking)	10		
合計	98人 (39%)	合計	109人 (43%)	合計	44人 (18%)
遺産目録	251件				

(出所) Lorraine Flisher, *Cranbrook, Kent, and its Neighbourhood Area, C. 1570 - 1670*, University of Greenwich (博士論文), 2003, pp.91-92を加工した。明らかな数字のミスは筆者の判断で修正を加えた。

ると、第1に、農業—79人（34.4%）、製造—104人（45.2%）、流通—47人（20.4%）と、3部門のなかで、「製造」部門が半数近くを占めていたことがわかる。第2に、この「製造」の中身を検討してみると、「繊維」が104人中76人（73%）と4分の3近くを占めていることが判明する。他方で、鍛冶工、皮革工、木材加工などの職種も、ウィールド地方という、森林牧畜地帯に位置するクランブルックの特色が示されていることも見逃せない。さらに第3として、農業において、「農民」(Farmers)を「専業農家」と考えると、小土地保有農とは、研究史的には土地の収穫物だけでは家計に十分ではない農家のことであり、家計補完をするために、なんらかの「副業」を必要としたことが考えられる。それが79人中、20人（25%）を占めており、製造関連の職種で家計を補ったとすれば、製造業のウェイトはさらに強いものであったろう。

次に、1620年から1669年までを見てみると、第1に、農業—98人（39%）、製造—109人（43%）、流通—44人（18%）と、若干数値は低下しているものの、3部門のなかで、「製造」部門が中心を占めていることに変化はない。第2に、この「製造」の中身を検討してみると、鍛冶工、皮革工、木材加工なども検出されるが、「繊維」が109人中77人（71%弱）と中心的位置を占めていたことがわかる。第3に、農業の中で98人中、26人（26%強）が「小土地保有農」であったことは、上でも触れたように、彼らがなんらかの「副業」をもっていたことを予想させるものである。

また表1を全体としてみて、流通が18%から20%を占め、その内の45%程度が商店であったことは、クランブルックが市場町であったことを顕著に示す証拠でもあるが、繊維関連の職種（職人）を多く抱えた市場町というのがより正確な表現といえるだろう³⁸⁾。

ところで同じく表2は、フリッシャーが遺産目録を基にして、表1と同時期までのクランブルックの周辺教会区の住人の職業構成を分類したものである。この表2について、最初に1570年から1619年までを見てみると、第1に、農業—279人（47%）、製造—259（44%）、流通—53人（9%）と、3部門のなかで、「農業」部門が半数近くを占め、さらに「製造」部門がそれよりも3%程度低いものの、農業に続いていることがわかる。第2に、この「農業」の中身を検討してみると、専業である「農民」(Farmers)のほかに、「小土地保有農」が85人（279人中の30%強）を占めていたことがわかる。クランブルックの状況と同じく、彼らも専業農家では家計を充足できないために、なんらかの「副業」を必要としたと推測される。第3に、製造部門に関して、繊維が144人と、213人中67.6%を占め、その他、鍛冶工、皮革工、木材加工、建築など、ウィールド地方らしい職種が検出されるのも特徴的である。

続いて1620年から1669年までを見てみると、第1に、農業—185人（40%）、製造—213人（47%）、流通—59人（13%）と、3部門のなかで「製造」部門が中心であったことがわかる。さらにその製造部門においても「繊維」が213人中144人と67.6%を占めていることが特徴的である。同時に、鍛冶工、皮革工、木材加工、建築が検出されることは、前の時期からの継続性を示している。農業部門については185人中、144人（77.8%）が農民であり、41人（22.2%）が小土地保有農であった。

表2 ビダンデン、ベネンドン、ガウドハースト、ステイブルハースト、ハウカースト、フリテンデンの職業構成

1570～1619年 農業 (Farming)		製造 (Manufactures)		流通 (Distributive)	
農民 (Farmers)	194	繊維 (Textiles)	176	商店 (Shopkeepers)	30
小土地保有農 (Smallholders)	85	鍛冶工 (Smiths)	24	醸造 (Brewers) / 製粉 (Millers)	18
		仕立屋 (Tailors)	10	専門職 (Professionals)	3
		皮革工 (Leather)	24	運搬 (Carriers)	2
		木材加工 (Woodworking)	23		
		建築 (Building)	2		
合計	279人 (47%)	合計	259人 (44%)	合計	53人 (9%)
遺産目録	591件				
1620～1669年 農業 (Farming)		製造 (Manufactures)		流通 (Distribution)	
農民 (Farmers)	144	繊維 (Textiles)	144	商店 (Shopkeepers)	17
小土保有農 (Smallholders)	41	鍛冶工 (Smiths)	13	醸造 (Brewers) / 製粉 (Millers)	35
		仕立屋 (Tailors)	9	専門職 (Professionals)	6
		皮革工 (Leather)	24	運搬 (Carrier)	1
		木材加工 (Woodworking)	16		
		建築 (Building)	7		
合計	185人 (40%)	合計	213人 (47%)	合計	59人 (13%)
遺産目録	457件				

(出所) Lorraine Flisher, *Cranbrook, Kent, and its Neighbourhood Area, C. 1570 - 1670*, University of Greenwich (博士論文), 2003, p.94 を加工した。明らかな数字のミスは筆者の判断で修正を加えた。

全期間を通じて、「流通」の中では商店、醸造・製粉が中心を占めているが、これはこうした諸教会区が、周辺地域のための「市場町」として機能したことを示しているのであろう。そしてそこに住む住民のかなり多くは、「農民」でもあり、同時にまた、製造（中心は繊維関連）を担う「職人」でもあったのである。

(2) クランブルックの宗教的伝統

1995年5月に立教大学の招きで、イングランド地域経済史の第一人者マーガレット・スパッフオド (Margaret Spufford) 教授が一連の公開セミナーを実施したが³⁹⁾、その中のひとつに「16、17世紀における宗教の重要性」があった。その第二部「非国教徒の分布、副業と情報伝達」において「……16、17世紀において『農村工業』が存続した地域、つまり、副業地帯、あるいは1970、80年代の専門用語でいえば『プロト工業』地帯と、また強力な非国教主義の伝統が存在した地域の間

に想定される結合について広く考えさせられるのである」とコメントしている⁴⁰⁾。また、サースクにも言及して、「彼女は、『手工業の位置は偶然ではなく、むしろ、ある種の農村共同体や社会的組織と関連している』との結論を下した」⁴¹⁾としている。サースクやスパッフオドなどの実証史家の直感に基づく指摘がいかにその後のイングランド経済史において重要な意味をもっていたか、わたしたちは改めて問い直さなければならない。それは彼女らが、かつて狭義の「大塚史学」が戦前から戦後にかけて見ようと努力して見通せなかったところを、十二分に補うような史実を提供しているからである。まずは、森林・牧畜地帯、沼沢地帯は、農村工業が発生しやすく、また14世紀のロラード派以来の非国教徒が出現しやすい環境にあったという基本線を記憶すべきであろう（後段参照）。

これと関連して、わが国のこれまでの研究蓄積の中で、社会背景を押さえつつケントの宗教的伝統を扱うさいには、同志社大学名誉教授今関恒夫の業績が信頼できる研究書として最初に扱われるべきである。今関は、サースクやスパッフオドの論点の重要性に早くから気づき、共鳴しながら、リチャード・バクスターの研究に沈潜したのである。このことは、16世紀後半から17世紀までのピューリタニズムや非国教主義の動向が、租税や独占問題以上に重要であり、「宗教」が内戦の主たる原因であったことを想えば、納得できることである。

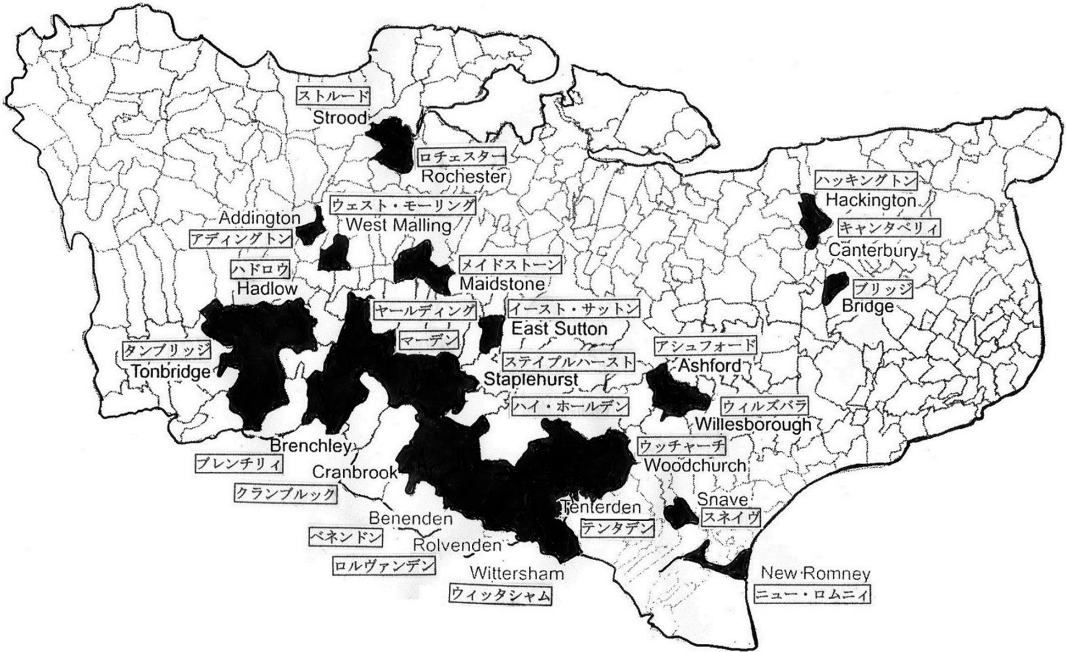
イングランド教会（アングリカン）とカトリシズム、イングランド教会と分離主義者、イングランド教会とその内部刷新を求める「ピューリタン」、さらには、内戦期から王政復古にかけて出現する種々の「分派」の主張など、研究課題として取り上げるテーマは多様である。歴史家はさまざまに織りなすテーマをひとつひとつ解きほぐすしかないのであるが、宗教史を社会史や経済史と重ね合わせる場合には、平面的にではなく、対象を内側からくり抜くように、立体的に理解する必要がある。

とりわけ「ピューリタニズムと地域構造についての研究はすでに通説ともいえる一致点を見いだせる段階にきている」という、今関がサースクに依拠して整理した主張は非常に大切である。同氏の言葉を引用するならば、「牧畜農業地帯と森林地帯は、同時に毛織物農村工業地帯でもあり、地域のそうした経済的特質を媒介にしてピューリタニズムと結びつくというのが従来の考え方であり、それは誤りではない」⁴²⁾のであり、現在においても、この方向で地域史の個別研究は進展しているのである⁴³⁾。この点をわたしたちは、クランブルックの宗教社会学的研究においても出発点としたい。

①ロラード派の伝統

図5は、ケント大学のマシュー・レイノルズ（Matthew Reynolds）が作成した、ロラード派——14世紀世中頃からイングランドで拡延——の分布図である。この地図の概観から判明することは、当時カトリック教会から異端と目されたロラード派の出現する場所にはある種の「地域性」を観取できることだろう。すなわち、北部ではストルード（2C）、ロチェスター（2C・2D）、ウェスト・モーリング（2C）、アディングトン（2C）、ハドロウ（3C）、メイドストーン（3D）、北東部では、

図5 ケントのロラード派の分布 (1422~1510年)



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.78 を筆者が加工した。

ハッキングトン (2G)、キャンタベリイ (2G)、ブリッジ (3G)、中部ではアシュフォード (3E・3F)、さらに東南部の沿岸ニュー・ロムニイ (5F) にも同派は出現しているが、もっとも集中して現れるのが、ウィールド地方の南部 (テナタデン、クランブルックなど) であったことである。レイノルズは、ウィールド地方のロラード派について、テナタデン (12件)、ベネンドン (3件)、ロールヴァルデン (3件)、クランブルック (7件)、ハイ・ホールデン (1件)、ウィッタシャム (1件)、ステイブルハースト (8件) という数字を挙げ、その他、メイドストーンとその周辺 (8件)、アシュフォード (5件)、キャンタベリイ (4件) としている⁴⁴⁾。ここで挙げられた地名が、ケントの(旧)毛織物工業地帯と重なっていることに注意したい。パトリック・コリンソンは「確かなことは、1420年代にもなると、ケント・ウィールド地方はロラード派の異端者たちの温床 (breeding-ground) となっていたことである」⁴⁵⁾と指摘している。

このように、ケントに関しては「ウィールド地方およびメドウェイ河流域地方はロラードが浸透していた地域として知られた」⁴⁶⁾が、その「地域」は同時にまた、後段で触れるように、16世紀後半以降ピューリタニズムが浸透した地域ともなった。宗教社会的には、この「連続性」が重要な意味を帯びていたのである。

②プロテスタンティズムとピューリタニズムの出現

広義のプロテスタントを定義するのは比較的容易かもしれないが、その反対に、プロテスタン

ティズムの徹底化とされるピューリタニズムを定義しようとすると、容易ではない。しかしピューリタニズムを扱う場合には、まずその定義から始める必要がある。

元立教大学教授の八代崇は、ピューリタンの定義の難しいことを指摘しつつ、「……エリザベスの解決に満足しえなかった急進的プロテスタントで、ジュネーブやチューリッヒの教会の模範になって英国教会内の非聖書の要素やローマ教会の『腐敗墮落』の残滓を一掃し、より純粋で徹底的な教会改革を志向した人々をピューリタンと呼ぶことにする」と定義している⁴⁷⁾。また、著名な福音派神学者のジェームズ・I・パッカーは、「私はピューリタニズムを、エリザベス体制が許容するよりも更なる宗教改革と更新を追求した16、17世紀の運動、と定義する」とし、トマス・フラーやリチャード・バクスターの文献から、「ピューリタン」という語の適応として、①『祈祷書』にためらいを覚えた聖職者、②長老主義的改革案の擁護者、③カルヴァン主義的敬虔を实践する聖職者と信徒、④ドルト会議を賞賛する厳格なカルヴァン主義者、⑤神事にかかわる事柄、イングランドの法、臣民の権利に対して敬意をしめした議員、治安判事、ジェントリーなど、以上5点（引用者の要約）を示唆している⁴⁸⁾。

定義としては八代もパッカーも類似しており、ここでもそれに従うが、経済史的な観点から宗教改革やピューリタニズムを扱うさいには、神学的・教義的なアプローチだけでなく、カルヴァン主義的敬虔を实践する信徒という側面から、そうした教えが信徒の「生活習慣の改革」(reformation of manners) にどのように関係したのかを考慮する必要がある。エセックスの地域史研究者のウィリアム・ハント (William Hunt) やニューイングランド経済史の研究者ステファン・インズ (Stephen Innes) の言葉を使うなら、「規律文化」(culture of discipline)⁴⁹⁾が一般信徒の中にどのように根づくか、という問題である。内側から、より広くみるならば、「少数派の運動」(a minority movement) としての「ピューリタニズム」⁵⁰⁾と所謂「民衆文化」(popular culture) との摩擦・対立ということになるだろう。あるいは、誇張されすぎた表現かもしれないが、マックス・ヴェーバーの言葉を使うなら「……新しくもたらされたもの(カルヴィニズム—引用者)は、およそ考えうるかぎり家庭生活と公的生活の全体にわたっておそろしくきびしく、また厄介な規律を要求するものだったのだ」⁵¹⁾ということになるわけである。ピューリタニズムを通じての、イングランドの「文化闘争」が、やがて17世紀中葉の革命で頂点に達し、王政復古で押し込められるが、その後は「非国教主義の伝統」(nonconformist tradition) という流れの中で、19世紀後半あるいはそれ以降も、イングランド史を縦に貫く主要テーマとなるのである⁵²⁾。

ところで、ロラード派の流れを受け継いで、その後に、テナデン、クランブルック、ビダンデンの「織物教会区」(clothing parishes) において非正統的かつ反礼典主義 (anti-sacramentarian) の思想が存在したことを、早くも1511年にワーラム大司教 (Archbishop Warham) が明らかにしている⁵³⁾。このロラード派の影響に続いて、16世紀前半に、やがて大陸からルター主義も伝えられることとなる。ルター主義は1520年代から、ライ、ドーヴァなどの5港都市や低地地方を通じて、ウィールド地方の「織物都市」に紹介された。さらに、その時代の正統的宗教から異端視され

るような宗教思想の流れは継続し、メアリ1世（在位 1553～1558）のカトリック体制時における殉教者は、ケントについてはジョン・フォックス（John Foxe）の『殉教者列伝』（Acts and Monuments）の中に66人記録されているが、そのうち64人の平信徒殉教者はウィールド地方の都市やアシュフォード、メイドストーンから現れている⁵⁴。

エリザベス朝に入り、克蘭ブルックの最初のプロテスタントの牧師（minister）はリチャード・フレッチャー（Richard Fletcher）である。1561年に牧師となったフレッチャーは、ピューリタンではなかったといわれているが、カトリック教会の伝統的な聖像（traditional iconography）を除去したといわれる⁵⁵。克蘭ブルックおよびその周辺地域では1570年代にそうしたプロテスタント的な動きが生じている。また、校長のトマス・グッド（Thomas good）を含むピューリタンの集団（party）が、追放された印刷工（printer）であるジョン・ストロード（John Strowd）をヤールディング（Yalding）から連れてきて、リチャード・フレッチャーが不在のときに説教をさせている。当時、周辺地域には、数人の巡回説教者がいたようである⁵⁶。

それでは、プロテスタント的改革を住民が受け入れたとする指標を歴史家はどこに求めるべきなのであろうか。たとえば、遺言書の「前文」（preambles）にプロテスタント的色彩の強い文言が加えられることがある。これについては、その土地の遺言代筆人（scribe）の個人的な嗜好が反映されていることも考えられ、必ずしも、故人の意思表示と一致しないとの批評や批判もあるが、遺言人（testator）が、それまで使われていた聖人（saints）への言及を避けるなど、あるいは「キリストの恩寵（merits of Christ）のみによって」などの表現が出てくるなど、そこに根本的な変化が生じたことも否定できない。1570～1620年、大執事管区（Archdeaconry）および主教（Consistory）の法廷での克蘭ブルックからの遺言状205件が、そうした地域の代筆人から唱導された「改革派的式文」（reformist formulae）——代表的な文言は「私のすべての罪の赦免」（remission and forgiveness of all my sins）とか「救いを堅く信じつつ」（steadfastly believing to be saved）——を持つ前文をもっていた⁵⁷。

次に聖書の個人所有がプロテスタント改革思想の普及の目安になったともいわれる。それはプロテスタントの指導者が、信徒が家庭においても聖書の「言葉」に馴染むように彼らを教導したからである。1570～1660年までの遺産目録（Inventories）において、克蘭ブルック—115件（全体の18.2%）、ガウドハースト—60件（20%）、ハウカースト—36件（13.1%）、ピダンデン—39件（12.5%）、ベネンドン—31件（12%）、ステイプルハースト—47件（20%）が聖書を保持しており⁵⁸、この数字は故人が亡くなる前に聖書を他人に譲渡するケースを想定していないので、仮に譲渡も考慮に入れば、聖書の個人所有の数字はさらに高かったと考えられる。さらに、克蘭ブルックの115件の内訳をみると、織物労働者（textile workers）—38件（33%）、商工業者（tradesmen）—26件（23%）、農民（farmers）—23件（20%）となっていた。ハウカーストの36件の内訳については、織物製造業（textile manufacture）—13件（36%）、農業（farming）—8件（22%）、商工業者（tradesmen）—7件（19%）となっていた。これに対して、ガウドハーストは19件（32%）、

ステイブルハーストは16件(34%)、ベネンドンは12件(39%)が「農民」となっており、克蘭ブルックとハウカーストだけが織物業の職人(労働者)が優勢となっていたのである⁵⁹⁾。

さらにまた、ウィールド地方においては、プロテスタントの「非信従主義」(nonconformism)の証拠が他の地域と比べて多く検出される。ロバート・J・アーチェソン(Robert J. Archeson)はキャンタベリイ主教区(Diocese of Canterbury)の研究(学位論文)の中で、1590年から1641年までの非信従主義者への告発と集会の存在について整理しているが、克蘭ブルック—4件(非信従的な集会記録、㊦)、ガウドハースト—5件(非信従的な集会記録、㊦)、ビダンデン—3件、ベネンドン—2件、ステイブルハースト—2件、ハウカースト—1件となっており、さらにその周辺教会区においては、マーデン(Marden)—10件(非信従的な集会記録、㊦)、スマーデン(Smarden)—6件、ロルヴァンデン—7件、テナデン—6件、ヘッドコーン(Headcorn)—4件、サトン・ヴァレンス(Sutton Valence)—5件(非信従的な集会記録、㊦)、エジャトン(Egerton)—6件(非信従的な集会記録、㊦)となっていた⁶⁰⁾。こうした諸教会区においては、個人が家庭で聖書を所有する件数は増加しており、それがより急進的な信仰思想を抱くきっかけをつくった可能性を考えることは許されるだろう。

ところで、ピューリタニズムを探る場合、「説教」(sermons)の重視という点もあげられる。克蘭ブルックには1575年に、先にあげたピューリタン説教者ジョン・ストロードが到着し、急進的な少数派の教会区民に影響を及ぼしている。彼を直接招いたのは教会区牧師のリチャード・フレッチャーであったようだが、克蘭ブルック内のより「熱烈な」(hotter)、「敬虔な」(godly)動きを広めるきっかけが、1575年から1585年までに招かれた一連の「ピューリタンの副牧師説教者」(puritan curate-preachers)であった⁶¹⁾。1579年から1年間トマス・イーリー(Thomas Ely)が、また1583年にはピューリタン神学者(puritan divine)のダドリー・フェナー(Dudley Fenner)(c.1558-1587)が、それぞれ副牧師として就任している⁶²⁾。

興味深いことに、フェナーの就任後、子どもに「敬虔な」(godly)名前——Be-Strong、Comfort、Faint-Not、Freegift、From-Above、Love、Mercy、Morefruit、Moregift、No-Strength、Repentance、Smallhope、Standwell、Thankfulなど——をつけるケースが増加していく⁶³⁾。1589年から1600年にかけて、生まれてくる子どものために、そうした「強い教訓的(didactic)な含蓄」を帯びた名前を考え出し、それらを使用する習慣がケントの克蘭ブルックから始まり、それがケントの他の地区に広がり、さらには州の境界を超えイースト・サセックスにも拡大したといわれる。また少し遠く、ノーサンプトンシャーの一部地域でも使用されたようである⁶⁴⁾。

また、克蘭ブルックにおいては、宗教的行事(religious observance)の施行が強化されていく。同時に聖職者の怠慢(negligence)や聖職者の義務の不履行が問題にされていく。もちろん克蘭ブルックの教会区内の住人がすべて教会改革に熱心であったわけではない。だが、そうした告発(presentments)内容の多くが伝統的なプロテスタントの礼拝(agenda)がうまく機能していたことを示している。カトリック的な聖像の除去、教会の側壁の白色化、ステンドグラスや装飾品の一

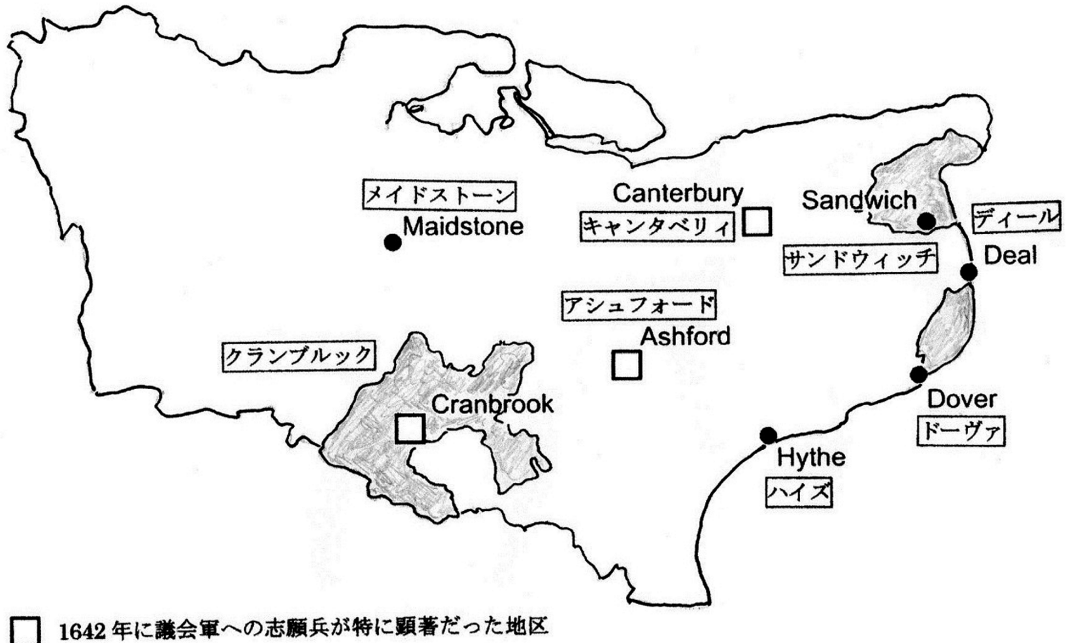
掃、チャーチ・エール (church ales) の廃止なども、一般的にはピューリタンの改革に含まれていたといわれるが、しかし、それらがすべてピューリタンのプログラムであったかどうかについては議論の余地がある。「クランブルックのプロテスタントをオーソドックスな伝統主義者とピューリタンの反対派に分けることは誤りであり」、いうならば「より急進的な見解が伝統的な教会区のコミュニティー内で発酵していた」というのが妥当なところかもしれない⁶⁵⁾。

ところで、ここで注意しなくてはならないのは、クランブルック内部のピューリタンの思想や動きももちろん重要ではあったが、それらはあくまでも地域の「少数派」にすぎなかったことである。エリザベスの宗教的解決に外面的な服従を選択したのが「多数派」であったとすれば、それに抵抗する非信従者は「少数派」であったのである⁶⁶⁾。その少数の「敬虔な」信仰者たちも教会区教会内に留まっていたのであり、分離主義の動きを示したわけではない。クランブルック内部には、トマス・ロバーツ卿 (Sir Thomas Roberts) のような、ピューリタンの改革思想に同感を示す当局者もあり、そうした人物がロバート・アボット (Robert Abbot) のようなピューリタン聖職者を援助していたのである。それでは、ピューリタニズムが急進的になり、分離主義に向かうのはいつからであろうか。クランブルックの場合、それは1640年代に入ってから可能性が高い。1641年7月5日付のアボットからのエドワード・デーリング卿 (Sir Edward Dering) への手紙によれば、「既存教会に反対する、教会区の中産層 (the middle sort) からなる40人の会衆 (communicants) が無秩序を誘発し、アボットの牧会と伝統的な教会秩序に不満を示している」としている。1640年代に入り、ロード体制に抵抗する少数の「プロテスタントの熱心な層」(hotter sort of Protestants) が伝統的な既存の教会秩序の速やかな改革を求める圧力団体を形成したのである。17世紀半ばまでの多くの伝統的ピューリタンは「長老主義者」であり、1650年代になってから、バプテリスト、会衆主義者、クエーカーがクランブルックおよび周辺地域で自己を確立していくのである⁶⁷⁾。

続いて図6は、カンタベリー・クライスト・チャーチ大学教授のジャクリーン・イールズ (Jacqueline Eales) が作成した、1642年段階における議会軍への志願兵の出身地を示す地図である。この図の解説については、イールズの次のようなコメントを記せば十分であろう。すなわち「ケントの国王への政治的抵抗は、明らかに、宗教的な異議申し立てや監督 (主教) 制度の廃止または規制への要求と結び合わさっていた。かくして議会主義は、長期にわたり確立した、宗教的不服従の伝統を有する場所で最も強かったのであり、そこには、クランブルックのようなウィールド地方の教会区や州東部のさまざまな場所だけでなく、アシュフォード、キャンタベリイ、ドーヴァ、メイストーン、サンドウィッチのような都市も含まれていたのである⁶⁸⁾。」要するに、かつてのように、内戦時の議会軍の推進力や大義を経済的な要求や階級的な対立に求めても袋小路に陥るだけであり、対立の基軸は、宗教のあり方にあったというのである。換言するならば、議会派について人びとを検出するためには、主としてピューリタニズムに注目する必要があるということである。

それでは、王党派支持者の強い教会区はどこであったのかという疑問も生じるだろう。それについて、ここでは触れることはせず、改めて別の機会に論じることにした。

図6 1642年の議会派の支持基盤

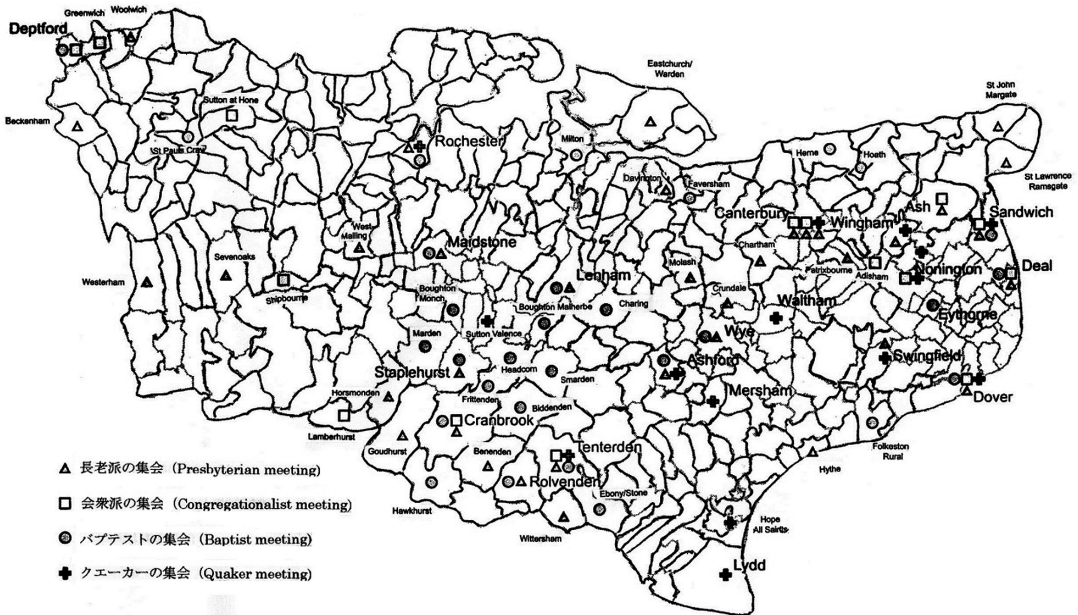


(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.89 を筆者が加工した。

③非国教主義の伝統

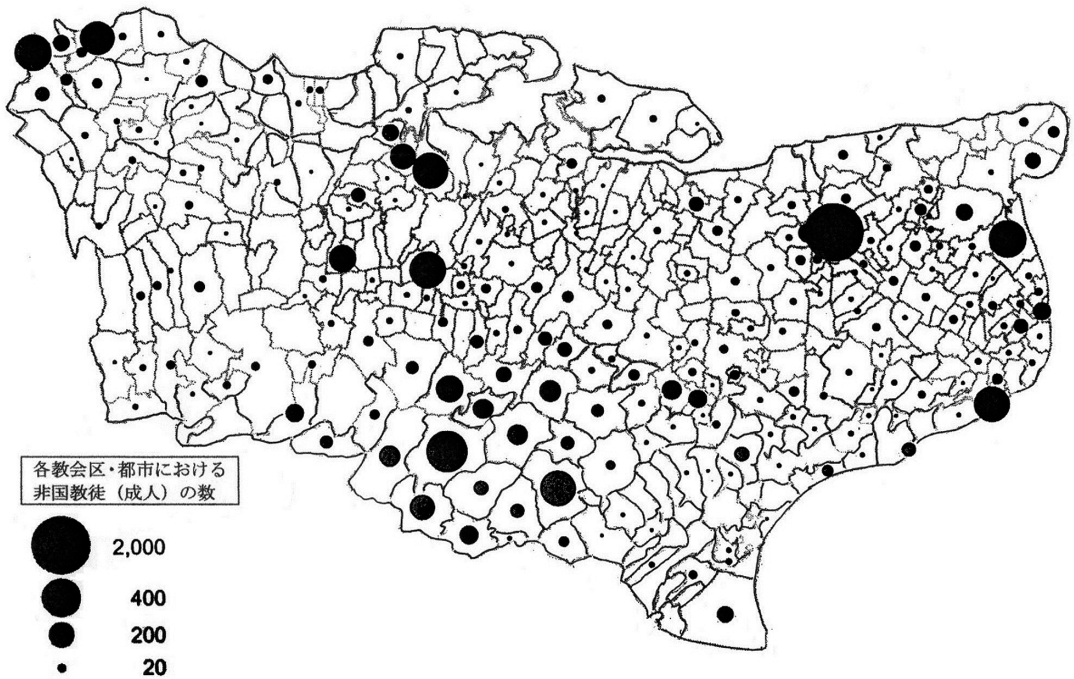
図7は、1672年3月15日、チャールズ2世からの「信仰自由宣言」(Royal Declaration of Indulgence)に基づいて申請された非国教徒の集会の位置を示している。この宣言の内容は「プロテスタント非国教徒にもカトリック教徒にも、教会に関するすべての刑罰法を停止する、非国教徒は公に礼拝すること、カトリック教徒は私宅でミサをすることを認める」(青柳かおり)というものであった⁶⁹⁾。クランブルックにおいては、長老派、会衆派、バプテスト派の集会を確認でき、周辺地域まで含めると、バプテスト派の集会申請が際立っている。またロチェスター、メイドストーン、キャンタベリイ、アシュフォードの周辺地区、サンドウィッチ、ディール (Deal) (3H)、ドーヴァー、アッシュ (Ash) (2H)、ノンングトン (Nonington) (3G)、エイソーン (Eythorne) (3H)、スウィングフィールド (Swingfield)) (3G) などの沿岸および沿岸付近都市、さらにロンドンに近接した北西部のデトフォード (Deptford) (1A) での集会申請が目立つだけでなく、クランブルック、テナダデン、ロールヴァルデン、ステイブルハーストなどのウィールド地方に申請が集中していることに注意すべきである⁷⁰⁾。同時にまた、こうした諸地域が、先に触れたロラード派やピューリタニズムが出現した地域とも重なり合っていたことにも、留意すべきであろう。他方において、北西部の平場穀作地帯においては、申請があったとしても極めてまれであったことも記憶すべきであ

図7 ケントの非国教徒の集会申請 (1672年)



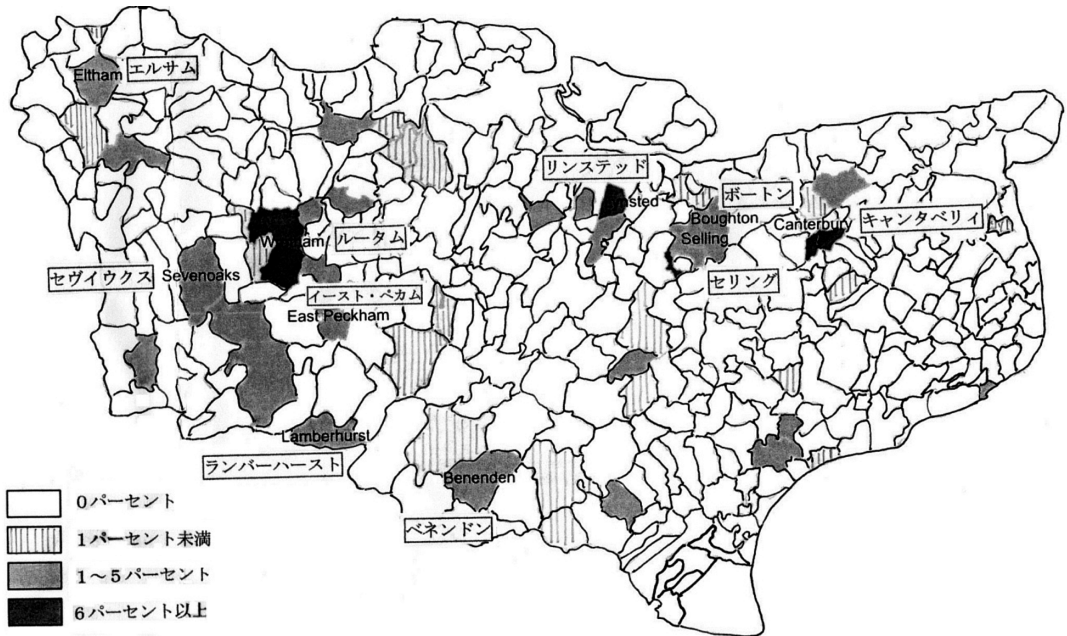
(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.85 を筆者が加工した。

図8 ケントの非国教徒の分布 (1676年)



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.84 を筆者が加工した。

図9 ケントのカトリック教徒の分布 (1676年)



(出所) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2005, p.83 を筆者が加工した。

る。

また図8は、マシュー・レイノルズがコンプトン・センサスに基づいて作成した非国教徒の人数分布を示すものであり⁷¹⁾、図7を補完するものである。細部はともかくとして、非国教徒(カトリックを除く)の厚みをはかるにはたいへんわかりやすい地図になっており、ここから400人ないし2000人規模の非国教徒に注目すると、キャンタベリイが断然多く、続いて東岸部の都市サンドウィッチとドーヴァ、さらに内陸部の都市ロチェスターとメイドストーン、ロンドン寄りの西北部の教会区デトフォード(1A)、グリニッジ(Greenwich)(1A)にも非国教徒が集中しているのがわかる。

ちなみに代表的な都市を原史料から検討してみると、キャンタベリイ(コンフォーマリスト2831人、ノン・コンフォーマリスト2083人)(以下、同じ配列)、サンドウィッチ(1100人、315人)、クランブルック(898人、400人)(前述)、テナタデン(899人、300人)、ドーヴァ(1628人、301人)、メイドストーン(2690人、310人)、チャタム(Chatham)(2D)(1500人、300人)、ロチェスター(1850人、144人)となっていたのである⁷²⁾。

ところで、ケントの非国教徒については、さらに少数派であるカトリック教徒の分布もさぐる必要がある。それはコンプトン・センサスの主要目的が「カトリックの現状を調べること」でもあったからである。図9もマシュー・レイノルズによって作成されたものであるが、イングランドにお

いてはカトリックは「領主の宗教」(a seigneurial religion)といわれており、ケントの代表的なカトリック・ジェントリーには、リンステッド(2E)、エルサム(1A)、キャンタベリイのローパー家(Ropers)、ボートン(2F)のハーキン家(Hawkins)、ベネンドン(4D)のギルドフォード家(Guildfords)、セヴィウクス(3B)のローン家(Loans)、ランバーハースト(4C)のダーレル家(Darrells)、イースト・ペカム(3C)のウェッテンホール家(Whettenhalls)などがいた。カトリック信徒はきわめて少数派であって、比較的多くを占めた、たとえばリンステッドにおいても、コンフォーミスト183人、ノン・コンフォーミスト1人に対して、カトリック信徒(papists)18人であった。ただしキャンタベリイとルータム(2C)は、例外的であり、とりわけルータムにおいては、「461人の住人のうち71人がカトリックに愛着があった」⁷³⁾といわれている。

5. 結語

17世紀のイングランド地域史を総合史として理解しようとする場合、それが経済史研究であっても宗教史(教会史)を組み入れて、宗教社会学的に扱う必要がある。それは17世紀中頃の「大きな出来事」である内戦と革命が、重税や独占問題を上回って、国家の教会体制(教会統治)をどう構築するかという、なによりも宗教問題を前提としていたことが近年の研究蓄積から解明されたからであり、イギリスの地域史研究者は、とくに意識せずとも、それぞれの研究のどこかで教会史を組み入れているからである。わたしたち日本人も宗教史(教会史)を政治史や経済史に組み込んで重ね合わせることで、17世紀の歴史像をより鮮明に描くことができるのである。

一方において、プロト工業化という観点からすると、クラークソンによれば、一般的な定義としては、①職人の地域外市場に向けての生産活動、②半農半工の労働集約的労働を基礎とする生産活動、③農村工業が食糧需要を産むことで商業的農業を刺激したこと、④製造業地域にある都市は商業活動の中心でもあったこと、という具合に4点に整理されている⁷⁴⁾。

クランブルックおよびその周辺地域は16、17世紀において、ウィールド地方の経済の中心地帯であり、典型的な森林・牧畜地帯に位置していた。住人は、中心的な工業活動として織物業を営みながら、製鉄や皮革などの日常関連の仕事も行ないつつ、相互に局地的な分業関係を展開していたのである。従って、クランブルック周辺地域を典型的な「農村工業(プロト工業)地帯」とみなしてよいだろう。また、小農が叢生し、多くの自由土地保有農が半農半工の経済活動を営む「開放型教会区」(open parishes)⁷⁵⁾であったことも、記憶される必要があるだろう。

だが、クランブルックおよびその周辺地域の毛織物業や製鉄業は、17世紀後半から18世紀にかけて、衰退していく運命にあった⁷⁶⁾。元サセックス大学教授の経済地理学者ブライアン・ショート(Brian Short)は「(ウィールド地方の)毛織物業は1600~1630年の間に最盛期を迎えた」と記している⁷⁷⁾。製鉄業については、ケントの製鉄用の溶鉱炉(blast furnances)の数をみると、8件(1574年)、9件(1653年)、8件(1664年)、4件(1720年)となっており、この件数から、18

世紀以降に衰退していく様子が窺われる⁷⁸⁾。こうした衰退の背景には、スウェーデンからの銑鉄(pig-iron)の輸入量の増加、南ウェールズ、ミドラズ、スコットランドの製鉄業の勃興があったのである⁷⁹⁾。

宗教的側面については、議論の大前提として、王政復古後にケントの圧倒的多数の住民がイングランド教会に参列していたことを確認しておかねばならない。そうした状況の中で、17世紀後半の非国教徒は「少数派」として存続していくが、その分布には明らかに地域的な偏差があった。これについては、最初に引用した中村論文も詳細に論じており、現時点の研究水準を十分に先取りしていたが、改めて本稿においても、歴史的な「連続性」の中で、克蘭ブルックおよびその周辺地域がケントの非国教徒が集中していた地区のひとつであったことを確認しておきたい。本稿では政治面については触れなかったが、ピーター・クラークによれば、王位継承排除危機(Exclusion Crisis)(1678~1681年)頃になると、州ジェントリーが政治的に二つのグループに分裂し、ホイッグ(Whigs)とトーリー(Tories)を形成するが、前者のホイッグは、「反フランス」、「反宮廷」、「反カトリック」に偏向し、ドーヴァー、サンドウィッチ、ウィールド地方というかつての宗教的な急進主義の地盤から支持を得ており、また後者のトーリーは、かつての王党派(Cavaliers)、宮廷官吏(Court placemen)、多くの地主、商人、聖職者からの援助があった⁸⁰⁾、という。今後の課題ではあるが、宗教的摩擦が政治的立場の違いにつながることを示唆しており、興味深い指摘である。

これ以降の宗教史については、1851年の宗教センサスの分析もなされねばならない。イングランド教会の支配体制に非国教徒が食い込んでいく際の、地域的な「連続性」も確認されている⁸¹⁾。経済史については、克蘭ブルック周辺地域の産業が工業から外れていったのは事実であるが、だからといって、ケントそのものが脱工業化を経験したと判断するのも早計である。1800年以降、「ケントの工業活動の中心は、ウィールド地方からメドウェイ渓谷、河口、テムズ川北岸に顕著にシフトした」からである⁸²⁾。

本稿は、地図を利用しながら地誌を背景に、克蘭ブルックとその周辺地域の経済史的、宗教的な特徴を論じたものであるが⁸³⁾、内容は試論であり、概観に留まっている。だが分析手法としては、イングランドの地域史や地方史研究において、きわめてオーソドックスなものであり、数多くの学位論文も執筆されている。経済史的、宗教史(教会史)的側面からの、「地域性」、「連続性」が強調されており、従来の、断絶を強調した経済史学への一定の批判も含まれている。だが、ここでは、宗教社会学的な観点から克蘭ブルック周辺地域の歴史過程の基本線を示すことが主目的であったので、詳細は今後の研究に委ねることにしたい⁸⁴⁾。

【注】

- 1) C. C. R. Pile, *Cranbrook: A Wealden Town*, Cranbrook and District Local History Society, 1990 (第3版) が克蘭ブルックの概観を理解するのに役立つ。

- 2) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *An Historical Atlas of Kent*, Phillimore, 2004, p.60. 項目の執筆者であるシーラ・スウィーティンバラ (Sheila Sweetinburgh) は「しかし、都市民が等しく関与していたので、これは『農民の反乱』ではなかったことは明らかである。彼らは、農村の隣人と同様に、中程度の富の人々、職人、小規模商人、農民であり、単なる社会の片隅にいる人々ではなかった。都市は地方から分離されておらず、都市の住民は、家族、交易やその他、社会的・経済的紐帯、および頻繁な移動を通じて結び合っていた」と、貴重なコメントを書いている。
- 3) 革命に関する研究史については枚挙にいとまがないのはいうまでもないが、日本における文献については、最近のものとして、岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』山川出版社、2010年がある。英文については、以下のような文献が参照されるべきである。Martyn Bennett, *The English Civil War, 1640-1649*, Longman Pub. Group, 1995, p.2. 「チャールズ王の宗教的帝国主義」(the religious imperialism of King Charles) という言葉は象徴的である。Toby C. Barnard, *The English Republic 1649-1660*, Longman Pub. Group, 1998, p.75. 「道徳革命」(moral reformation) という用語に注意。
- 4) Michael Zell (ed.), *Early Modern Kent 1540-1640*, Boydell Press, 2000, p.300. 執筆者はイールズ教授 (Jacqueline Eales) である。
- 5) Anne Whiteman (ed.), *The Compton Census of 1676: A Critical Edition*, Oxford University Press, 1986, p.26.
- 6) 中村勝己は宗派の分布を主として共同体規制論からみることのできる経済史家であり、独自の宗教社会学を構築している。この点、イギリス人歴史家の側にその方法論的意味を理解できていないケースがときに見られる。
- 7) John Miller, *The Glorious Revolution (Second Edition)*, Longman Pub. Group, 1997, pp.62-64.
- 8) Georges Edelen (ed.), *The Description of England by William Harrison*, Dover Publications, 1994, p.217.
- 9) A. M. Everitt, The making of the Agrarian Landscape of Kent, *Archaeologia Cantiana*, Vol.XCII, 1976 (1977), pp.1-31. この論文はケントの地誌的概観を理解するのに役立つ。
- 10) Joan Thirsk (ed.), *The Agrarian History of England and Wales, Volume IV, 1500-1640*, Cambridge University Press, 1967, p.55.
- 11) *Ibid.*, p.56.
- 12) *Ibid.*, p.57.
- 13) *Ibid.*, p.58.
- 14) *Ibid.*, pp.58-59.
- 15) *Ibid.*, p.59.
- 16) Michael Zell, *Industry in the Countryside: Wealden Society in the Sixteenth Century*, Cambridge University Press, 1994, p.232. 日本における研究では、浦本寛雄「中世イギリス・ケント地方のガヴェルカインド保有態様—C.Sandysの研究から—」『熊本法学』第21号、1973年、29-86頁がある。
- 17) Joan Thirsk (ed.), *op.cit.*, p.63.
- 18) C. W. Chalklin, The Rural Economy of a Kentish Wealden Parish 1650-1750, *Agricultural History Review*, Vol. 10, 1962, p. 29. チョークリンのこの論文は、ウィールドに位置するタンブリッジ (Tonbridge) を扱っている。17世紀において穀作用の開放耕地が存在してなかったという点も、強調されてよいだろう。*Ibid.*, p.31.
- 19) A. R. H. Baker, Field Patterns in Seventeenth-Century Kent, *Geography*, Vol.50, 1965, p.22.
- 20) Lorraine Flisher, *Cranbrook, Kent, and Its Neighbourhood Area, C. 1570-1670*, University of Greenwich, 2003. [本論文を British Library の Electronic Theses Online Service を通じて入手することができた。]
- 21) *Ibid.*, pp.12-13.

- 22) Mavis E. Mate, *Trade and Economic Developments, 1450–1550: The Experience of Kent, Surrey and Sussex*, Roydell Press, 2006, p.176.
- 23) Daniel Defoe, *A Tour Thro' the Whole Island of Great Britain, Divided into Circuits or Journies*, 1724 (但し本稿での引用は以下による。Daniel Defoe, *A Tour Through England and Wales*, Volume 1, Everyman's Library, 1928, p.115).
- 24) J. Thirsk, Industries in the Countryside [in F. J. Fisher (ed.), *Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England*, Cambridge, 1961], pp.79–80.
- 25) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.20.
- 26) Mavis E. Mate, *op.cit.*, p.56.
- 27) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.74.
- 28) *Ibid.*, p.74. 中段・上の箇所。
- 29) Michael Zell, Population and Family Structure in the Sixteenth-Century Weald, *Archaeologia Cantiana*, Vol.C, 1984/85, p.257 にウィールドの諸教会区 (1560 年) の一覧が整理されているが、クランブルックは人口 2000 人、人口密度 192 で、ともにウィールドの筆頭であった。
- 30) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.74. 中段・下の箇所。
- 31) *Ibid.*, p.74. 右段・上の箇所。
- 32) *Ibid.*, p.74. 右段・中の箇所。
- 33) 拙著『プロテスタント亡命難民の経済史』昭和堂、2010 年、第 2 章を参照。
- 34) John Louis Mark Gulley, *The Wealden Landscape in The Early Seventeenth Century, and its Antecedents*, Thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy in the University of London, 1960, pp.189–201.
- 35) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.76.
- 36) *Ibid.*, p.76. 中段・上の箇所。チングリィ周辺地区の製鉄業については、David Crossley, *The Bewl Valley Ironworks Kent c.1300–1730*, Royal Archeological Institute, 1975 を利用することができる。また、ゴering の以下の論文も重要である。J. J. Goring, Wealden Ironmasters in the Age of Elizabeth [in E. W. Ives and R. J. Knecht (eds.), *Wealth and Power in Tudor England*, Athlone, 1978], pp.205–227.
- 37) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.76. 右段・上の箇所。
- 38) John Louis Mark Gulley, *op.cit.*, p.204. 16 世紀後半のクランブルックの毛織物工業の史料 (遺言目録) については以下も参照できる。Elizabeth Melling (ed.), *Kentish Sources III. Aspects of Agriculture and Industry*, Kent County Council, 1961, pp.105–113.
- 39) 講演内容の一部は、マーガレット・スパッフオド、鶴川馨編『イングランド近世における宗教と社会』立教大学国際学術報告書第十三輯、1996 年としてまとめられている。その他、「初期工業が繁栄し、これらの農業史家や経済史家によって作られたリストと、ラディカルな非国教徒のなかの系譜的連続性を想定しているヒル博士によって作られたリストとの間にはじつに高度の関連がある」(54 頁)、「森林、あるいは牧畜地帯と、非国教徒、あるいは『熱狂的』見解に導く読書時間に最初に気づいた人物は、ジョン・オウベリであった」(56 頁)、「現代の歴史家のなかで、森林、牧畜、沼沢地帯とヒル博士によって後に敷衍されることになる非国教徒の関連について最初に気づいたのはエヴェリット教授であった」(57 頁) というスパッフオドのコメントに、本稿の見通しも重なってくる。
- 40) 同書、53 頁。
- 41) 同書、54 頁。
- 42) 今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会—リチャード・バクスター研究』みすず書房、1988 年、60 頁。

- 43) 今関恒夫『バクスターとピューリタニズム—17世紀イングランドの社会と思想』ミネルヴァ書房、2006年、「ピューリタニズムと農地制度」61-66頁。今関がここで指摘する分析視角は、現在のイギリスの歴史学界において、地域史を考慮に入れたピューリタニズム研究の基本中の基本であり、共通の観点であることを強調しておきたい。
- 44) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.78. ロラード派に関する日本語の説明では、以下の文献を参照。八代崇『イギリス宗教改革史研究』創文社、1979年、52-73頁。
- 45) Patrick Collinson, *Cranbrook and the Fletchers: Popular and Unpopular Religion in the Kentish Weald [in Godly People: Essays on English Protestantism and Puritanism, Hambledon Continuum, 1982]*, p.402.
- 46) 今関恒夫、前掲書（『ピューリタニズム』）、同書、37-38頁。
- 47) 八代崇、前掲書、188頁。ピューリタンの定義については、以下も参照。松谷好明『ウェストミンスター神学者会議の成立』一麦出版社、1992年、70-73頁。
- 48) James I. Packer, *A Quest for Godliness: The Puritan Vision of the Christian Life*, Crossway Books, 1994, p.35 [ジェームズ I. パッカー、松谷好明訳『ピューリタン神学総説』一麦出版社、2011年、41頁]。
- 49) William Hunt, *The Puritan Moment: The Coming of Revolution in an English County*, Harvard University Press, 1983, pp.79-81, 140-144, 250-252. Stephen Innes, *Creating the Commonwealth: The Economic Culture of Puritan New England*, W. W. Norton & Company, 1995, pp.132-159.
- 50) Barry Reay, *Popular Cultures in England 1550-1750*, Longman, 1998, p.81.
- 51) マックス・ヴェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年、18頁。John Spurr, *English Puritanism, 1603-1689*, Palgrave Macmillan, 1998, pp.187-188.
- 52) 同書、132頁。ヴェーバーが「根本的に異なった種族の人間」とか「宗教改革以後の歴史全体は、二つの型のイギリス人気質の闘争ともみることができる」といつていることに注意すべきである。
- 53) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.182.
- 54) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.80.
- 55) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.183. クランブルックの15世紀末から16世紀初頭までの「祭壇」(altars)に関する記録には以下がある。Leland L.Duncan, Notes on the Topography of Cranbrook Church, *Archaeologia Cantiana*, Vol.XXXVII, 1925, pp.21-31.
- 56) Brian M. Hogben, Preaching and the Reformation in Henrian Kent, *Archaeologia Cantiana*, Vol.CI, 1984 (1985), p.179.
- 57) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.185.
- 58) *Ibid.*, p.188.
- 59) *Ibid.*, p.189.
- 60) Robert J. Acheson, *The Development of Religious Separatism in the Diocese of Canterbury 1590-1660*, A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy at the University of Kent at Canterbury, 1983, p.12.
- 61) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.194.
- 62) ピーター・クラークの説明によると、ダドリー・フェナーは最も卓越したケントの説教者の1人であり、ケンブリッジ大学のピーターハウスで学び、1570年代初頭にカートライトのサークルに加わったために、大学を去ることを余儀なくされた。クランブルックで短期間働いたが、数年後にカートライトに従って、アントワープにわたり、そこで改革派教会のやり方で叙任を受けた。1583年頃にイングランドに戻り、クランブルックで副牧師として働いた。Peter Clark, *English Provincial Society from the Reformation to the Revolution: religion, Politics and Society in Kent, 1500-1640*, Harvester Press, 1977, p.170.
- 63) Lorraine Flisher, *op.cit.*, pp.194-195.

- 64) Christopher Durston and Jacqueline Eales (eds.), *The Culture of English Puritanism 1560–1700*, Palgrave Macmillan, 1996, p.23. これ以降において、「新しいエルサレム」(New Jerusalem)の確立を目差すピューリタンの動きが生じ、住民の強い抵抗にあいながら、クランブルック、リュウウェス (Lewes)、ライ (Rye)、グロスター (Gloucester)、コヴェントリイ (Coventry)、ニューベリイ (Newbury)、ノーサンプトン (Northampton)、ドーチェスタア (Dorchester) などのピューリタニズムの拠点都市が出現するのである。 *Ibid.*, p.30.
- 65) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.199.
- 66) *Ibid.*, p.200.
- 67) *Ibid.*, pp.203–204.
- 68) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.88.
- 69) 青柳かおり『イングランド国教会—包括と寛容の時代』彩流社、2008年、45頁。
- 70) ケントの王政復古以降の非国教徒の分布については、地帯別の分類を意識しているわけではないが、次の論文が利用できる。G. F. Nuttall, Dissenting Churches in Kent before 1700, *Journal of Ecclesiastical History*, Vol.14, No.2, 1963, pp.175–189.
- 71) コンプトン・センサスの史料上の問題については、以下の論文も参考にできる。
Mary J. Dobson, Original Compton Census Returns: The Shoreham Deanery, *Archaeologia Cantiana*, Vol. XCIV, 1978(1979), pp.61–73.
- 72) Nigel Yates, Robert Hume, Paul Hastings (eds.), *Religion and Society in Kent, 1640–1914*, Boydell Press, 1994, p.16.
- 73) Terence Lawson & David Killingray (eds.), *op.cit.*, p.83.
- 74) L. A. Clarkson, *Proto-Industrialization: The First Phase of Industrialization?* Macmillan, 1985, pp.15–16 [L. A. クラークソン、鈴木健夫訳『プロト工業化—工業化の第一局面?』早稲田大学出版部、1993年、15–16頁]。これとの関連で、近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010年、84頁。執筆担当者がプロト工業化に触れた文章において、「プロト工業化が直接に工業化に繋がった可能性は低いが……」と解説しているが、こうした表現には多少の違和感を覚える。というのも経済史の分野において、「イギリス産業革命の前提としてのプロト工業化」は、相当程度、確立された理論だからである。また、その前の「穀作地域と牧羊地域」という表現は、対照表現を意図したと思われるが、それならば「穀作地域と牧畜地域」に変更すべきだろう。なぜならば、穀作地域は「牧羊の中心地」でもあったからである。
- 75) Lorraine Flisher, *op.cit.*, p.248.
- 76) Peter Clark, *op.cit.*, p.399. ピーター・クラークは「法廷と州のジェントリーはウィールド地方が、急進的な大義にたいして精神的にコミットしたことを決して許さなかった。その結果の一つが、ウィールド地方の工業が崩れるのを許したことだったのかもしれない」と書いている。
- 77) Brian Short, The De-industrialisation Process: A Case Study of the Weald, 1600–1850 [in Pat Hudson(ed.), *Regions and Industries: A Perspective on the Industrial Revolution in Britain*, Cambridge University Press, 1989], p.166.
- 78) Alan Armstrong (ed.), *The Economy of Kent 1640–1914*, Boydell Press, 1995, p.90. 製鉄業の衰退過程については、ケント・ウィールド地方よりも、サセックス・ウィールド地方の動向を見たほうが顕著に理解できる。ちなみにサセックス・ウィールド地方の溶鉱炉の数については、43件 (1574年)、27件 (1653年)、21件 (1664年)、10件 (1720年) となっており、18世紀に入ってからの衰退の様子が理解される。

- 79) Pat Hudson (ed.), *op.cit.*, p.164.
- 80) Peter Clark, *op.cit.*, p.406.
- 81) 資料的には、Margaret Roake (ed.), *Religious Worship in Kent: the Census of 1851*, Kent Archaeological Society, 1999がある。xi から li までのイントロダクションは有益である。「非国教徒と定住パターン」(Nonconformity and the Pattern of Settlement) (pp.xxxix) は、特によく読まれるべきである。以下の指摘に注意。① 17世紀において非国教徒は、多くの小規模の自由土地保有農を抱えた開放型教会区に確立する傾向があり、反対に、単一家族に支配された場所では、非国教徒は排除される傾向があったが、1851年センサスにおいても、同様の分析指標となる。②しかし、1851年センサスにおいては、非国教徒はメドウェイ川の諸都市 (Medway towns) やサニット (Thanet) などの東部ケントの沿岸港やリゾート地、アイル・オブ・シェッパイ (Isle of Sheppey) に多く出現している。Alan Everitt, *Pattern of Rural Dissent: Nineteenth Century*, Leicester University, 1972, pp.55-61 でエヴェリットがケントの非国教徒について整理した内容は現在でも、熟読されてよいだろう。
- 82) John Whyman, *Industralisation by Fits and Starts: The Kentish Experience* [in Department of Adult Education (ed.) *The Onset of Industrialisation*, University of Nottingham, 1976], p.16.
- 83) 本稿のような、地誌学を下敷きにした歴史学の手法をとる際に、しばしば受ける「誤解」は、<それが地理的決定論ではないか>というものである。これに対する回答は、まったくのノー (否定) であって、この手法は、人やモノの移動、経済立地のような地理的要因を含んではいるが、権力論や共同体論といった、人間社会の根本的な力学——きわめてオーソドックスな歴史学の手法——を前提にしており、むしろ、マックス・ヴェーバーの歴史学方法論に近いものと言えるということである。これは、内田芳明も指摘するように、ヴェーバーの文化比較の研究手法に「地理的・風土的意義いかん、の問題がかくされているように思われる」ということであり、ヴェーバーにおいては「地理的・風土的方法が重要な位置をしめていた」ことにも通じている。内田芳明『ヴェーバー「古代ユダヤ教」の研究』岩波書店、2008年、206頁、210頁を参照。この点については、以下の研究書も参考にできる。Stephen Turner (ed.), *The Cambridge Companion to Weber*, Cambridge University Press, 2000, p.265.
- 84) Margaret Spufford (ed.), *The World of Rural Dissenters, 1520-1725*, Cambridge University Press, 1995, pp. 40-42. また、A. D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change 1740-1914*, Longman, 1976, pp.98-99 の指摘は、スパッフオドのコメントを先取りしている。